辻 千春（Chiharu TSUJI）

学位：博士（学術）

略歴：名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻修士課程修了

名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程単位取得満期退学

専門分野：東アジアの表象文化

研究課題：表象文化、植民地文化、異文化接触、中国語教育

【著書】

〈単著・教科書〉

・（入門初級中国語テキスト）『場面で学ぶおもてなし中国語』（あるむ、2021 年 3 月）

・上記の補助教材『HSK 単語攻略ワークシート』（あるむ、2023 年 3 月）

・『空白の美術史 ― 植民地下「朝鮮」で見る創作版画』（中日新聞社、2020 年 2 月）

・『戦争と年画 ―「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダ ―』（梓出版社、2000 年 1 月）

〈共著〉

・『戦争のある暮らし』乾淑子編（水声社、2008 年 8 月）

〈単著・学術論文〉

・「『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流 ― オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して ―」（中国語教育学会第 20 回全国大会準備委員会編『中国語教育学会第 20 回全国大会予稿集』分科会 p.1-p.5、2022 年 6 月 1 日）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（6）― 朝鮮人美術家による日本の創作版画の修得とその展開について ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 33、2018 年 3 月）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（5）― 釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 32、2017 年 3 月）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（4）― 仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 32、2017 年 3 月）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（3）― 京城における『朝鮮創作版画会』解散後の展開と『日本版画』 の流入 ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016 年 3 月）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（2）― 京城における日本人の活動と『朝鮮創作版画会』の顛末」（『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016 年 3 月）

・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 ―『朝鮮創作版画会』の活動を中心に ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 30、2015 年 3 月）

・「日中両国の報道版画 ―19 世紀に現れた錦絵と年画にみる日清戦争の描き方を中心に ―」（『名古屋大学博物館報告』No. 27、2011 年 12 月）

・「日本統治期の台湾における蔵書票の展開」（中京女子大学アジア文化研究所『アジア文化研究所論集』

第 7 号、2006 年 3 月）

【その他】

〈研究発表〉

・「『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流―オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して―」（中国語教育学会第 20 回全国大会分科会発表、於：宮崎大学、2022 年 6 月 5 日）

・「『中国語ポートフォリオ』＋カリキュラム＋CC ラウンジ（Chinese Communication Lounge）」― 愛知文教大学中国語教育改革プロジェクト：中国語学修意欲の維持・継続と中国語運用能力養成のための‘能動的教育’の実践例として」（第 16 回中国語教育学会ポスター発表、於：早稲田大学、2018 年 6 月 3 日）

・「飾り絵に耳を澄ませば！？― 中国年画でたどる庶民の願い ―」（名古屋大学博物館第 37 回企画展講演会講師 2018 年 2 月 17 日）

・「絵は口ほどにモノを言う！？― 中国年画でたどる政治 ―」（名古屋大学博物館第 37 回企画展講演会講師、2018 年 3 月 10 日）

・「中国の正月の飾り絵を見る・聞く？」（愛知文教大学公開講座第 8 回講師、2017 年 1 月）

・「空白の美術史、植地期朝鮮における創作版画の展開についての研究」について」（第 21 回版画史研究会特別講演会講師、於：東京古書会館、2016 年 11 月）

〈社会活動〉

・愛知県小牧警察署国際化問題アドバイザー（2016 年 12 月～）

・名古屋大学博物館第 37 回企画展「春を迎える ― 年画に込められた願いと意図」の展示協力及び指導（展示期間：2018 年 2 月 6 日～5 月 12 日）

・文部科学省 SPH 事業「コミュニケーション能力向上のための中国語会話指導法の研究委託による名古屋市立商業高等学校における中国語会話指導（2016 年 5 月～2017 年 2 月）

【研究資金獲得状況】

・2020 年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する出版助成」受領（対象書籍『空白の美術史―植民地下「朝鮮」で見る創作版画』中日新聞社刊）

・2015 – 2017 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「空白の美術史、植民地期朝鮮における創作版画の展開についての研究」（課題番号 15K02181、研究代表者）

令和 5（2023）年度ティーチングポートフォリオ

氏　名	辻　千春	職位／役職	教授／グローバル教育センター長

1. 教育の理念

本学の教育理念に基づき、グローバル化する社会において果敢に生き抜く社会人力を有する学生の育成を念頭においている。すなわち、多文化共生社会において必要不可欠である、異文化に対する理解を深化させるとともに、言語（中国語）の基礎力と応用力の修得を、学生が自立的に実施していくように導くことを教育活動の指針としている。学生が自立的に学修活動を実践していくためには、何のために、何をするのか、について学生自身が理解する必要があり、その理解を促すことにこそ教育活動の重点があり、社会人力を有する人材を養成する教育機関が果たすべき使命であると考えている。

2. 教育活動の内容

＜2022 年度＞

春期：

（学部）

・入門中国語Ⅰ　・入門中国語Ⅱ　・e-Tandem Learning 中国語 A　・異文化接触論　・「ことばと人文学」

・アカデミアゼミ A　・アカデミアゼミ C

（大学院）

・アジア社会文化研究 1　・研究指導 A

秋期：

（学部）

・初級中国語Ⅰ　・初級中国語Ⅱ　・e-Tandem Learning 中国語 **B**　・語学研修（台湾）＊非開講

・観光と地域創生＊コーディネート担当　・アカデミアゼミ B　・アカデミアゼミ D

（大学院）

・アジア社会生成論　・研究指導 B

＜2023 年度＞

春期：

・異文化接触論　・入門中国語Ⅰ　・入門中国語Ⅱ　・e-Tandem Learning 中国語 A　・「ことばと人文学」

・アカデミアゼミ A　・アカデミアゼミ C

（大学院）

・研究指導 C　・アジア社会文化研究 1

3. 教育の方法

（1）語学関連科目（中国語）

語学関連科目については、本学の学びの体系における主専攻の 1 つであり、多文化共生を生き抜く上で重要なスキルであるコミュニケーション力の養成や異文化理解の知見の獲得を目指している。その一環として、入門・初級中国語諸科目における基礎的な言語の運用能力の修得は不可欠である。学生にはその必要性について説明し、毎回の講義においては、学生の取りこぼしがないよう、課題の提出を課し、

その都度フィードバックを実施した。課題の未提出者が一定数いたことから、2023 年度より単元ごとの確認テストを実施し、より学生の修得度の測定の確度を向上させる方法に変更している。

一方、中国人学生との相互学修科目「e-Tandem Learning 中国語」では、コロナ禍に留学などの実践的な言語学修や国際交流が困難な中で、留学に値する教育活動となるよう、日中両国の学生が円滑、かつ継続的にオンライン学修が実施できるようサポートしている。講義終了後も両国の学生の交際が継続することや、長期留学へのステップとなることが目指すところである。具体的には、授業参観や毎回の学内講義における交流学修上の問題点やフィードバック、他セッションからの学びを促すことを通して、学生が学修成果を実感できるよう努めている。また、後述のように本科目の新規性に鑑み、毎回学生へのアンケートおよび学修成果報告書の分析により、改善を加えるようにしている。それに基づき、2022 年度春期からは日中合同イントロダクションの開催を、同秋期からは合同学修成果発表会の開催を導入している。

（2）教養関連科目

「異文化接触論」は、本学のカリキュラムにおいて「多文化共生を探求する分野」に属する科目であり、学生には中国の庶民文化を題材として、具体的に異文化接触と文化変容の事例を示しつつ講じている。歴史に関する知識が希薄な学生が少なくなく、国際間の交流や他文化の理解においては、歴史に関する知見の獲得は不可欠であると考える。そこで、講義中に学生自身に調査、発表させ、それを踏まえて、社会や庶民文化の変容などについて講じるようにし、理解を促すようにしている。また、実践（版画の摺り）してみることで、より中国庶民の文化についての知見を深化させることができると考え、2023 年度のコロナ規制緩和により早速実施した。

「ことば」に関する一連の科目が、本学の学びの根幹として 2021 年度にカリキュラムに体系化され、その一環である「ことばと人文学」について、2022 年度の初開講の主管を担当した。複数の専任教員によるオムニバス授業であることに鑑み、学生への教員対応および成績評価の平等性を担保しつつ、各教員の研究概要が学生に理解されるよう努めた。自身の担当講義時には、学生に教員の研究領域における「ことば」の意義が明快に理解されるよう、具体的事例を示し丁寧に解説し、学生自身にも「ことば」と社会やそこに暮らす人々の思いについて検討させるようにした。情報が多岐にわたったため、全てを理解することが難しい様子も見られたため、2023 年度はよりシンプルな内容となるよう情報を整理した。また、活発な意見交換ができるように、グループ討議についての感想を課題の 1 つとした。

「観光と地域創生」はコーディネート科目であり、実務家の教員により、フィールドワークの実施に基づくプレゼンテーションを最終的な学修成果とするものである。本授業を通して、実社会の問題やアイデアの提案など、社会人力として必要な能力や知見の獲得を目指した。

（3）アカデミアゼミ

アカデミアゼミでは、教員とのディスカッションや他学生の調査報告を聴くことを通して学生に研究テーマを探索させ、多角的なものごとの見方について理解を促した。また調査技術、執筆技術、プレゼンテーション技術などを段階を踏んで指導するようにしている。

（4）大学院関連諸科目

院生が自立的に、計画的に研究活動を進めるうえで必要なスキルを養成することを目指し、課題に対

する調査を毎週プレゼンテーションさせている。また、修士論文の執筆に向けては、テーマ選定の妥当性について、教員とのディスカッションを通して、学生自身が納得した上で確定し、自立的に研究が進められるように指導した。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

（1）教育活動の成果

中国語教育学会・日本中国語学会に所属し、学会主催の研究会および学会に積極的に参加し、教育方法や最新の研究成果を吸収することに努めている。それは、コロナ禍下に 2020 年夏季に実施された研修会で得た知見から、北京外国語大学とのオンラインを活用したタンデム学習を考案し、2021 年春期からカリキュラムに設置された「e-Tandem Learning 中国語Ａ」「同Ｂ」に結実されている。本科目は、新規の授業形式であるため、前掲のように毎期、学生の学修成果報告書および学生からの記名式アンケートを分析し、講義の改革を実施してきた。具体的には、日中両国の学生がセッションの進め方について共通に認識していること、セッションのための充分な学修準備なされていることなどが、セッションの活発化に影響があり、ひいては授業の満足度に多大な影響を与えることが判明した。そこで、日中合同の説明会の開催を実施すること、事前に学修テーマを決めておくことなどの改善をした。その成果（2021 年度春期～2022 年度春期）は、中国語教育学会第 20 回全国大会（宮崎大学 ZOOM 開催）において、分科会 A で、「『ポストコロナ時代』の言語学修・異文化交流－オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して―」と題して、口頭発表（査読付き）において報告した【「『ポストコロナ時代』の言語学修・異文化交流－オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して―」中国語教育学会第 20 回全国大会準備委員会『中国語教育学会第 20 回全国大会予稿集』（分科会：p1-5）】。また、2022 年度秋期からは、日中両国の学生に交流学修の成果がより実感できるように、合同学修成果発表会を開催することにした。学生からも、パートナーとの関係性や異文化交流への興味関心の深化について高く評価された。この再改善を踏まえた成果を、「ポストコロナ時代のオンラインを活用したグローバル教育―科目「e-Tandem Learning 中国語」における授業改善を通して―」（『教育研究』第 13 号、1-12p、愛知文教大学）として公刊した。学生は、本科目の学修成果として、前掲のように異文化交流への理解や、語学修得に対する意欲の向上をあげている。また、講義終了後も中国人パートナーとの交流を継続するとする学生も少なくなく、留学に代替する教育活動としての位置づけが明確化されたと考えている。

（2）評価と改善方策

入門・初級中国語諸科目では、既述のように 2023 年度から一単元終了ごとに理解度確認テストを実施し、学生の理解度を計測し、翌週の講義で補足する方法に変更している。2023 年度第 1 クオータにおいては、単位未修得者が減少しており、一定の成果があったと考えている。

「異文化接触論」については、学生の要望を受け、講義のまとめ資料を作成し、配信するようにした。また、既述のように中国近現代史や日中関係史に関する理解を、講義時の調査や課題などによって積極的に促すように努めた。あわせて、講義後の課題により理解度を確認し、講義を進展させるようにした。豊富な知見が獲得できる反面、理解が大変であったとの学生の声を受け、2023 年度は、講義全体の要点をまとめた資料を作成し、配信した。

「アカデミアゼミ」は、学生は、自身でテーマを選定し、一定の研究成果をレポートにまとめること

ができている。しかしながら、執筆技術については問題が少なくなく、その原因として、執筆時間が不足しているためと推察された。そこで、毎回、1 週間で実施したことを課題として書面で報告させ、着実に研究成果をまとめられるよう指導しているが、依然として執筆技術については改善の必要があり、さらにきめ細かく具体的な事例を示しながら指導していく必要があると考えている。

大学院関連諸科目においては、修士論文の執筆成就が究極の達成課題であるが、これまで修士論文の執筆時間が圧倒的に不足し、執筆内容に問題が少なくなかった。来年度の執筆成就に向けて、とくに研究指導においては、着実に研究を進め、早期に執筆に着手し完成できるように、毎講義時に執筆の進度を書面で報告させるようにした。この結果、2023 年春期においては執筆がある程度進行しており、引き続き同様の方法を採用していく。

5. 今後の目標

教育の理念に基づき、多文化共生社会において活躍できる人材の育成を期す。いずれの授業においても、学生に積極的な参加を促すべく、講義内における調査や、講義終了後に課題を課すなどし、より自立的、実践的な学修を促していきたい。あわせてこれまで通り学生へのフィードバックを的確に実施し、学修意欲の維持・向上に努めたい。とくに、中国語運用能力の獲得については、HSK の資格取得の単位認定制度が導入されたことで、早期の段階で積極的に学修に励む学生も得た一方で、言語学修に対する意欲の低い学生も一定数あり、さらにきめ細かい対応をしていく必要があると考えている。リメディアル教育の充実による修得度の平準化に努め、言語ラウンジ（CC ラウンジ）を大いに活用し、より活きた中国語の修得も促していきたい。あわせて、学生が異文化理解や歴史、文化に関する知見を深化させられるよう教育活動に努めたい。